



山澤 進

社団法人東北経済連合会副会長

時代の振り子

昨年は戦後60年という大きな節目を越えました。その間三度の転機を乗り越え日本は急速な発展を成し遂げました。終戦時の何もない荒廃した飢餓のくらしに明け暮れた当時のことを振り返ると人間裸一貫、何でもできる気がします。

考えてみればこの60年、恐ろしく変わったものです。もの不足のどん底から僅か10年で生産技術の復興を果たし生きることへの第一難関を越えたわが国は、大量生産・大量販売という手法で生活を広く支える産業構造の仕組みづくりに成功しました。そして大都市や工業地帯に人口を総動員し、効率よく近代工業国家像を築き、比類なき高度成長時代へと疾走してゆきました。その後、石油ショックを契機に石油依存型の生産からの転換を迫られ、産業の高度化を図って見事難関を乗り越えたのです。そして、安定成長から円高の豊富な外貨保有を背景に、株価と地価の高騰を招き平成バブルへと駆け登ってゆきます。やがて平成3年金融引き締めを引き金にバブルは崩壊し、深刻な失われた10年を経験することになりました。痛みに耐え改革を辛抱強く進めた結果、金融改革にもメドがたち、ここようやく回復の明るさが見えてきたというのがこの60年のあらましです。

このように過去幾度かの転機を乗り越えた原動力となったのは、等しく高度な技術力と勤勉さ、そして環境の変化に対応するスピードと集中力でした。また驚異的な発展に伴い数々の歪みも堆積してきました。大気や水の汚染、自然環境の破壊、くらしぶりも変わりました。夜更かし、朝食欠食と、生体リズムの乱れや食生活の乱れ、そして地域コミュニティの崩壊と、健康的な安住の場がなくなってきました。加えて少子高齢化の社会構造上の課題も重くのしかかってきています。これらは等しく経済行為を優先させてきた進歩的文明モデルに相対する課題であり、ちょうど60年の還暦で、時計の振り子のように相対方向へ振り戻すバランス回復作用を時の要請として働かせる時なのかも知れません。

幸いにして、東北には雄大な自然が溢れています。多機能な効率部分とともに自然と共生し良質なくらし環境の設計できるゆとりや真の豊かさに繋がるものがたくさんあります。東北は、わが国の中で理想郷の描ける可能性の最も高いエリアです。無限の可能性を秘めた東北、これを如何に活用できるか、私達に課せられた還暦の課題です。

(山形県商工会議所連合会会長 やまざわ・すすむ)